
真奈たんの夏休み

栗山ふにねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真奈たんの夏休み

【著者名】

栗山ふにね

【あらすじ】

2010年8月1~4日のブーケット8にて、無料頒布させていた
だいたものです(^ー^)

サークルでメインにやっている小説「都留たんつー」の番外編(^_>

いつものように家で寝ていると、なんとそらたんへ~さんが家に訪ね
てきた!
そらたんへ~にまで誘われて……。

登場人物紹介

> .i 1 1 5 3 6 — 1 6 3 7 <

遊大真奈太朗（35）

この物語の主人公。若星町に住んでおり、商店街にある「BIG BANG」というおもちゃ屋に勤めている。食べる事と寝る事しか興味が無く、とにかくずんぐりしている。

> .i 1 1 5 3 8 — 1 6 3 7 <

黒巻宙太郎（40）

「BIG BANG」の店長。昔、真奈太朗は彼の事が好きだった。とにかく口く、男の店員ばかり雇つてはケツを触りまくつてはいる。丸々と太った体型。

> .i 1 1 5 3 7 — 1 6 3 7 <

光野原葉亜人（35）

真奈太朗の小学生時代からの幼なじみで、小柄でぽっちゃりしている。「他の人とは違うんだぞ！」という事を見せつける為に、髪は黄色とオレンジのグラデーションにしている。とにかくハイテンションで、楽しい事や面白い事が大好き。普段は幼なじみの朝林清雄（あさはやしきよお）と「きよおはあと」というお笑いコンビを組みつつ、商店街にある「GAME HUNTER」というゲームセンターでバイトしている。

真奈たんの夏休み

あつちー……。
ヤミツルセえ……。

あーっ、もう一 寝苦しい！

これから夏は嫌いなんだよ！

扇風機でもつけるか。

リモコンに手を伸ばして、扇風機をつけた。
首振りになってるのを止める。

休みの日はやつぱり寝るに限る。

幼なじみの都留男と葉亜人が来ることもあるけど、それはそれでいい。

どうせ來ても来なくても、寝るだけだし。

呼び鈴が鳴った。

ん？ 噂をすれば影か？

起き上がって、尻搔きながらドア開けた。

「やあ

えつ？！

そこにいたのは、勤め先のおもちゃ屋「BIG BANG」の店長、黒巻田太郎さんだった。

いつも通り、口の周りにたっぷり髪を蓄えてニヤニヤしながら立っている。

な、な、なんでこの人が？！

「どうしたんだ？ 顔が真っ赤だぞ」

「いや、あの、その」

「いきなり俺が来て驚いてるのか？」

「そ……そうです」

そうに決まってる。

昔、好きだったって事がこの間バレたばかりだから尚更だ。

「今からもつと驚かせるような事、言つていいか?」

「な、何ですか?」

「俺どデートしないか?」

そ、そ、そ、宙太郎さんとデート?!

いきなり来て、デート?!

ど、どういう展開なんだ?

「か、からかってるんですか?」

「からかってなんかねえぞ。ただ単に店長と店員がお出かけしよう、つてだけだ」

「じゃあ何でデートって言つんですか?」

「最近は女の子同士が遊びに行くのも『デート』って言つたりして、じゃねえか。おっさん同士が遊びに行くのも『デート』って言つてもいいだろ?」

「?」

「そ、そうっすね」

大分違うような気がしたけど、とりあえずそう言つといった。

「どうせ家にいても寝るだけなんだろ? そんなんじゃ不健康だぞ」

「……じゃあ、行きます」

家にいても寝苦しいだけだし、宙太郎さんと一緒にでどつか行くのもいいと思ったから、そう答えた。

宙太郎さんの事はもう諦めて、愛とか恋とかの目で見ずに、あくまでも仕事だけの関係つていう事にしようと思つたけど、やっぱり今でもちょっと意識してる所はあるみてえだ。

まあ最初に会つたのが高一の時で、もう一十年近くもずっと付き合いがあるから当たり前つちゃあ当たり前だ。

いくら諦めるつて決めてても、仕事場でほとんど毎日顔を合わせるから、やっぱり意識しちまつ。

都留男の奴に顔赤いの指摘された時もあって、まいった。

「よしつ、決まったな。とりあえず着替える。さすがに寝巻きのままじゃまずいだろ?」

「……そうっすね」

「安心しろ。着替えを見ようなんて言つ魂胆はねえぞ」

「冗談で言つたつもりだうつけど、そうは聞こえなかつた。

宙太郎さんはよく職場で俺達の着替えを覗くんだ。

他の奴はギャグで受け流したりしてゐるけど、俺はそやはいかない。

顔がすんげえ真っ赤になつて、頭も真っ白になつて、もう訳分かんなくなる。

だから俺は、いつも見られてないかどうか心の中でジクジクしながら着替えてる。

たぶん、宙太郎さんもちょっと気付いてるんだろう。

今も「じゃつ、ゆっくり着替えてくれ」って言つてドア閉めてくれたし。

とりあえず、着替えるか。

押し入れを開けて、中に積んである服を出した。

着るもんなんて昔から凝つた事ねえから、どれもこれも地味だ。ガキの頃、周りの奴が「好きな女の子とデートする時の勝負服」とか言つてるの聞きながら「バツカジやねえの!」って思つてたけど、たつた今その気持ちが分かつた。

やっぱり好きな人と出かける時は、いいもん着てえよな。

悩んだ挙句、結局深い緑のTシャツとグレーの長ズボンにした。こんなかじや無難な方のはずだ。

「おまたせしました」

ドアを開けると、宙太郎さんがニヤニヤ顔のまま立つてた。

「お前、相変わらず地味だなあ」

やっぱり地味な方だつたか。

そりやあ、あん中から選んだんだからなあ。

「よしつ、街へ行こつ」

「え?」

「もつといい服買つてやるよ」

「べ、べ、別にいいつすよ」

「何言ってんだ。昔から好きだった男どハートする時ぐらい、おしゃれにしてもいいだろ?」

「からかわないでくださいよ」

「いいから行くぞ」

宙太郎さんは俺の手を引っ張つていった。
腕を掴まれた途端、胸がどきどきした。

十麗印電車の若星町駅から電車で十五分ほど行った所にある畠化戸駅で降り、街中をぶらぶらした。

俺達が住んでる町より都会で、派手な店がたくさん並んでる。

「ここにはよく来るんすか?」

「ああ、若い頃からよく来るや」

辺りを見渡してみた。

人、人、人。

こんなとこ、全然来た事ねえ。

元々若星町から出る事が無かつたし、それどころか家からもほとんどの出ねえ。

確かにこんな生活してばっかりじゃあ不健康だな。

「着いたぞ」

宙太郎さんはじとなくおしゃれな感じの店を手で示した。
シヨーウインドウにかつここのい服を着たマネキンが並んでる。

「ここで、服買うんすか?」

「ああ。お前に似合つのも、きっとあるやね」

「そうつすかね」

「もつと自信持てよ。とにかく入るや」

言われるがままに中に入った。

めったに来ないとこだからすぐえ緊張する。

「どんな服にする?」

「別に、何でもいいですみ」

「うーん、そうだなあ。普段でも着れるよつてシャツにしようか。

都留男が来てるよつなうんとかわいい奴

つ、つ、都留男が着てるよつなTシャツを……俺が？

アルファベットとか動物とかがプリントされてるよつなTシャ

ツを……俺が？

ちょっと恥ずかしいけど、宙太郎さんからのプレゼントだった
ら着れそうな気がする。

「真奈、こんなのはどうだ？」

な、な、名前で呼んだ！

それだけなのに、何でこんなじきじきするんだ？

そういうふしてるうちに、宙太郎さんがTシャツを一枚持つてき
た。

ピンク色でカエルがプリントされてるTシャツだ。

首元に黄色のラインが入つてて、カエルの上にはオレンジで「
FROG」って書いてある。

「変かな？」

「そ、そ、そんな事ないす。すゞいいすよ
「俺が選ぶと何でもいいのか？」

「ううう、痛いとこついてくるな。
さつそく試着してみようか

「ええっ！ 今つすか？」

「ああ、今だ」

そんなわけで、試着することになった。

試着室で、もう一度Tシャツを見てみた。
すごくかわいい。

確かに都留男や葉亞人だつたら喜んで着ただけど、俺が着て
似合うのか？

そもそもそんな事、今まで考えたこともなかつたな。

……宙太郎さんも色々考えて、今日連れだしてくれたんだろうな。
仕事以外は寝たり食つたりしてばっかりで、全然健康じやなかつ
たし。

その証拠に、こんなぶくぶく太つちまつたし。

銭湯で体重測つたら三ヶタが出て、すげえびっくりした。

そういうBIG BANGで働こうって誘つたの、都留男だつたな。

中学の時にあいつが出来たてのBIG BANGでバイトしだして、俺も来なかつて誘われた。

バイトは校則で禁止で、それ破つて叱られるのが面倒だつたから適当に「高校になつてからな」つて言つといた。

そしたらあいつ、本当に高校に進学してから誘つてきて、「高校生はバイトしてもいいんだぞ」とかにんまりしながら言いやがつた。断る理由もねえし、ちょうど金に困つてたから、まあやつてみてもいいかつていう感じで店に行つた。

そこで宙太郎さんと初めて会つたんだ。

少し濃いひげと、でっぷりと太つた体が特徴的だつた。

話してみると、結構いい人そつだつた。

大学で商学を勉強しながら店をやつてゐらしく、すんげえ感心したのを覚えてる。

学校の寮で書いてきた履歴書を見せて、簡単な面接をした後すぐ採用されて、次の日から働く事になつた。

宙太郎さんはとにかくエロくて、すぐケツを触つてきた。

照れながら「やめてください」とか言つて、ニヤニヤしながら「これは大人のコミュニケーションだ」つて言しながらさらさらいやらしく触つてきた。

ちんこや金玉触られた事も何度もある。

でも、いつも明るくて、ニコニコ(つていうかニヤニヤ)してて、ミスした時も怒らずに優しく注意してくれて、ぜつてえネガティブな事は言わなかつた。

それにおもちゃが何よりも大好きだつた。

働けば働くほど、宙太郎さんの事が好きになつていつた。

思い切つて告白しようと思つたけど、宙太郎さんが休日は街で男

をナンパしまくつてるらしいって噂を聞いた。

実際に、店でも色々な男のケツを触つてる。

勇気を出して、本人にその事を確認したら、あっさり認めた。

あまりにもあっさり認められて、しばらくほかんとした。

それから男として見るのはすっぱり諦めた……つもりだ。

でも、今日は宙太郎さんの方から誘つてくれた。

Tシャツも選んでくれた。

四十になつて、若くなくなつた宙太郎さんが今も男に声掛けまくつてるのか知らねえけど、それでも俺の事をちゃんと考えてくれてるんだ。

なんかすんげえ嬉しくなつた。

宙太郎さんの為にも、このTシャツを大事に着よ。

「おっ、なかなか似合つてるじゃねえか」

試着室のカーテンを開けた途端、宙太郎さんは言つてくれた。着た後に鏡を見て、ちょっとびっくりした。

こんな服着る事があるなんて、思いもしなかつた。

「……宙太郎さん」

「ん? 何だ?」

「ありがとうござります」

「どういたしまして。気に入つてくれたのか?」

「はい。かわいい服も、意外といいもんつすね」

「だろ? もつと買つか? ペンギンやウサギもあるぞ」

「今度は俺が選ぶつす」

「おっ、ノッてきたな」

買い物をした後、映画館で映画を見たり、なぜかおしゃれな喫茶店でコーヒーを飲んだりした。

「今日はどうだつた?」

宙太郎さんがチョコレートケーキを食いながら訊いてきた。

「すごく楽しかったです。ありがとうございました」「真奈は生真面目だな。都留男達もよく言つてるぞ」「そつすか？」

「まあ、礼儀正しいのはいいことだ」

「俺、今日外に出て本当に良かつたです」

「ほつ、それはそれは俺も誘つた甲斐があつたな」

「外の空気吸うのつていいもんですし、いつもやつて普段来ない所に来るのもなかなか面白いもんつすね」

「そうだろ？ お前仕事以外であんまり人付き合いなさそつだし、前から心配してたんだよ」

「……俺、これからは皆を誘つてどつか行つてみようと思ひます。一人もいいんですけど、皆で出かけるのもいいつて、宙太郎さんが今日教えてくれましたから」

「んな大それた目的はなかつたんだが、まあ、いい心構えではあるな」

「それでね、それでね、その遊園地のお化け屋敷すじいんだよ。新感覺で、すんごく夏にぴつたりなんだよ」

翌日、葉亜人がうちにやつて来てベラベラ話し始めた。

小学校時代からの幼なじみで、とにかくよく喋る奴なのだ。

今日は昨日行った居化戸市に、新しく遊園地が出来るとかいう話をしている。

「史上最強のジェットコースターがあつて、すんごく速さやすんごく恐いそんなんだよ。後ね、夏だからおつきいプールもあるんだよ。冬は凍らせてスケートリンクにするんだよ」

「……今度行くか、その遊園地」

「え？」

「都留男とか誘つて、皆で行くか？」

「うんつー！ 行こつ行こつ！ わーつ、真奈たんから誘うなんて珍しいねー！」

「まあな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7593n/>

真奈たんの夏休み

2010年10月8日13時48分発行